

フィールドノートから：仏領ポリネシア・タヒチ島

塩谷亨

今年初めて仏領ポリネシアのタヒチに行く機会を得た。タヒチ語はハワイ留学中に 3 年間学んだ。その最後の年にはタヒチ研修旅行が実施されたが、当時は月収 500 ドル足らずという極貧生活で到底参加は不可能であった。その後 10 年して、ようやくタヒチにいけるチャンスが巡ってきたのである。

成田からエア・タヒチ・ヌイの飛行機に乗り込んだ。最初の機内アナウンスはタヒチ語、フランス語、英語、日本語の 4 ケ国語で流れたので、これは良いリスニングの練習になるかもしれないと期待したが、その後はフランス語、英語、日本語の三ヶ国語と縮小され、タヒチ到着時の最後のアナウンスまでタヒチ語は聞かれなかった。

飛行機はタヒチに午前 4 時到着、飛行機を降りて空港建物に入ると陽気なタヒチアン音楽生演奏での歓迎。無事入国した後、タヒチでの最初の活動はタクシー乗車である。Iaorana! とタヒチ語で挨拶して行き先を告げると、タクシーの運転手は、「お前はタヒチ語がわかるんだな」とタヒチ語でべらべらと話しかけてきた。「タヒチ語は 3 年間大学で学習したがその後 10 年間しゃべっていない」と説明すると、日本の薬品会社のテレビ CM でもおなじみのフレーズ Aita paepae! 「気にするな」と一言、更に容赦なくべらべらと話し続けた。意外なことに「日本語を勉強していて、日本に行って日本語を勉強したいんだ」とのことだったが、日本語は一言も話さず最後までタヒチ語であった。眠さで頭が朦朧としているところを必死でタヒチ語を聞きながら、ようやくホテルについて「いくら？」と聞くと、さっきまでタヒチ語でしゃべりまくっていたこの運転手さんが驚いたことに ten dollars と英語で答えてきた。米ドルはあまり通用しないと聞いていたので財布には現地通貨しか入っていなかった。そこで、moni Tahiti 「タヒチの通貨」と言うと、なんと今度はフランス語で deux mille(2000 パシフィックフラン)と答えてきたのである。似たようなことがマルシェでもあった。昼食の調達に行った時のこと、焼いたパンの実を売っていたのでその店のおばさんにあれこれタヒチ語で尋ね、最後に「いくらか」と聞くと、これもフランス語で何やら cinq... 「5...」と答えてきた。この時は不意を付かれてフランス語の数字が聞き取れなかったので「タヒチ語で言ってくれ」と聞き返さなければいけなかった。

滞在先のホテルでのこと、ガイドブックによればこのホテルでは日曜日にタヒチの伝統料理のバイキングがあるとのことだったので、これはぜひにと予約しに行った。タヒチ語を話しそうなおばさんだったので、タヒチ語でいろいろ聞いていたら、残念ながら「今はもうやっていない」との事であった。ただ、「夕食にタヒチの伝統舞踊のパフォーマンスがある」というので、「何曜日か」と聞くと、それまでタヒチ語だったのがこれまた突然 Mercredi 「水曜日」とフランス語になった。一応聞き取れたが、急にフランス語

になったので少々心配になり Mahana toru? 「水曜日か？」とタヒチ語で確認すると、少し口ごもってから、「そうだ」と答えてきた。お金（おそらくは数字？）と曜日という商売では最も頻繁に使う項目についてはフランス語の方が頭が迅速に反応するようである。

ホテルにはケーブルテレビが入っていたが、CNN のチャンネルと字幕付きの映画などを除くとほとんどフランス語で、一日に何回かそれほど長くないタヒチ語番組がある程度であった。毎日午後 6 時 30 分からニュースがタヒチ語とフランス語であったのだが、この番組の形式が非常に興味深かった。我々のイメージするバイリンガルニュースとはずいぶん違い、一見するとモノリンガル放送なのだが二ヶ国語が混在しているのである。6 時 25 分ごろからタヒチ語による仏領ポリネシア全域の天気予報、30 分からタヒチ語のニュース番組が始まる。耳にタヒチのシンボルの花であるティアレ・タヒチを差したアナウンサーが現れる。所が、まだ始まったばかりだというのに、タヒチ人アナウンサーは同じスタジオにいる別のフランス人アナウンサーを紹介、そのアナウンサーがフランス語でしゃべりだす。どうもニュースの要約をしゃべっているらしい。もうタヒチ語の番組は終わってしまったのかと思っていると、まもなく最初のタヒチ人アナウンサーにまたバトンタッチし、タヒチ語のニュースが続く。その後 7 時前にはフランス語による天気予報、7 時からはフランス語ニュースが始まるが、今度は、フランス人アナウンサーがタヒチ人アナウンサーを紹介し、タヒチ人アナウンサーがタヒチ語でニュースの要約、その後フランス人アナウンサーにバトンタッチしフランス語ニュースが続く。同じスタジオに二ヶ国語のアナウンサーが面と向かって座り、バトンタッチしながらの二ヶ国語ニュースである。お互いにタヒチ語、フランス語の片方しかしゃべらない。フランス人アナウンサーはタヒチ人アナウンサーにフランス語で話しかけ、タヒチ人アナウンサーも頑としてタヒチ語でしか答えない。一見不思議な光景であるが、見ようによっては、顔も見えない副音声のバイリンガルニュースよりもずっとのどかであったかい感じがする。ちなみに、ニュースの中の街頭インタビューも同様である。レポーターがフランス語で質問すると、ある人はフランス語で、ある人はタヒチ語で答える、という不思議な光景をしばしば目にした。

タヒチ語が現地でのどの位話されているのか、実は少々不安があった。というのは、以前タヒチ語の中級クラスを受講しているときのこと、ハワイに英語の研修にやってきたタヒチの高校生グループが、我々のクラスを訪問してきたことがあった。その時、そのグループ内にはタヒチ語をしゃべる人があまりいなかったのである。このままフランス語に飲み込まれてしまうのではという不安を当時もったのを記憶している。しかしながら、実際にタヒチに行ってみて、まだまだタヒチ語は元気であり、フランス語と微妙な共同生活を送っているようである。道端の標識やビニール袋に印刷されたりサイクルのメッセージまで、タヒチ語とフランス語併記で書かれたものが町中に見かけられた。是非この調子でフランス語とタヒチ語が共存共栄して欲しいものである。

執筆者紹介

所属：室蘭工業大学共通講座

Email：shionoya@mmm.muroran-it.ac.jp